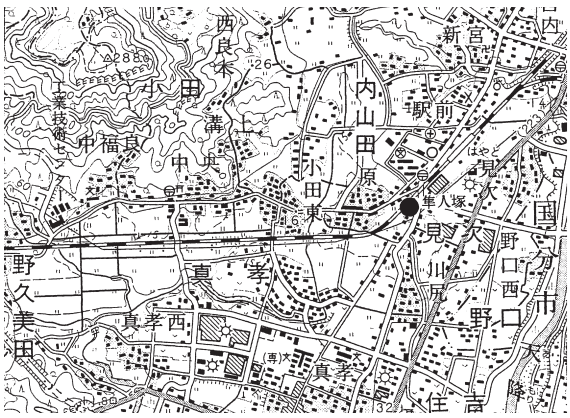
359

隼人塚（はやと）

（姶良郡隼人町大字内山田字山跡）



第１図　隼人塚の位置

位置と環境

隼人町で最もにぎやかな，国道223号線の「見次交差点」の西約300mに位置し，日豊本線隼人駅から南に約500mの線路横にある。標高15m前後のほぼ平坦な台地に立地する。周辺は，近年，急速に商業地，住宅地として展開してきており，水田と高層のビルが混在する。

調査の経緯

隼人塚は，大正10年３月３日に国の史跡として指定され，それ以来，数回にわたって整備がなされている。近年は，石塔・石像の風化が激しいことから，隼人町教育委員会によって，整備・復元事業が進められてきた。平成元年度より，周辺の土地買収や公園整備，ガイダンス施設の建設，７次にわたる隼人塚整備検討委員会の開催・発掘調査・復元事業が実施されている。

遺跡の概要

発掘調査前の塚は，16×14mの約200m²の広さの不整隅丸長方形を呈し，およそ３mの高さの塚に３基の石塔と石像４体が並んでいた。石塔の軸部には四方仏，石像の脚下には邪鬼が彫られ，笠石・石像には赤色の塗彩物がある。

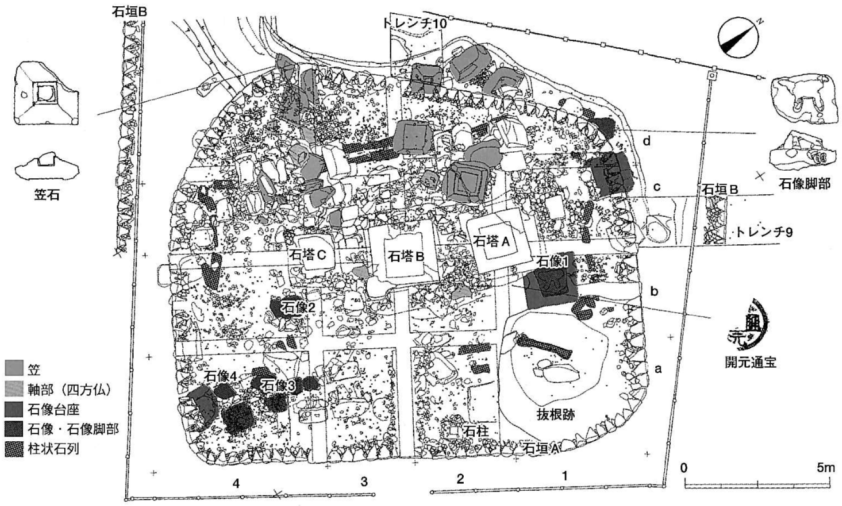
町名の由来ともなった隼人塚だが，多くの謎に包まれ，造られた年代についても，大別して次の三つの説があった。

①和銅元年（708）説　征服された熊襲・隼人族の霊を供養するために建てられたという伝説に基づくもの。

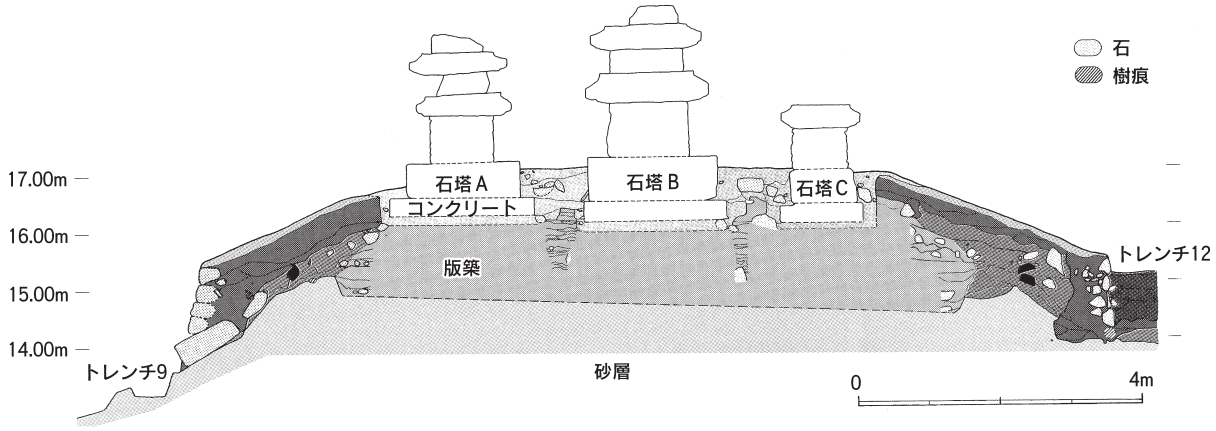
②平安時代末～鎌倉時代説　類似する大隅国分寺の六重層塔の記年銘，康治元年（1142）などから，同じ頃に造られたとする。

③明治以降建設説　江戸時代後期の文献「三国名勝図会」には，隼人塚としては国分市重久のものが記録され，また，明治35年の陸軍省の地図には，この塚は軍神塚の名称で記載されていることなどから，近辺にあった石塔，石像を明治頃に寄せ集めたものという説。

その性格についても，供養塔とか，お寺の跡（旧正国寺跡，尼寺跡）などの諸説があった。



第２図　遺物出土状況



第３図　隼人塚断面図

調査の経過と概要

発掘調査は平成６～11年度にかけて，年度ごとに６次にわたって実施されている。

第１次調査は，指定地部分の外側の公園内を，８箇所のトレンチを設定し調査している。調査面積は238㎡。第２次調査は，指定地内側の２箇所のトレンチ及び塚本体の表土部分計235㎡の調査が行なわれた。塚の周囲から近世の水田・ウネ状遺構，中世の道路状遺構が検出されており，中世以前の地山は，今より２ｍも深かったことが判明した。塚は今よりもかなり高く見えていたであろう。また，塚の中から，かなりの量の石塔・石像の部材が発見された。このほか，「コ」の字状の２列の柱状石列も確認されている。

平成８年度に実施された第３次調査では，塚南西コーナーから笠石の最上部が出土し，ホゾ穴に相輪基部がくい込んだまま見つかったり，北側コーナーでは，邪鬼をもつ石像脚部が出土した。また，石塔横の試掘溝では，版築工法も確認された。第４次調査では，手前の並んでいた２体の石像下から，石像脚部２基及び第５の石像を発見した。これで脚部が欠失していた石像３体分がすべてそろったことになる。これらの部材は，第３・４次調査にかけてすべて収納され，復元に利用された。

第５次調査は，石塔の基礎石の修復に伴って，平成10年度に40㎡が調査された。既に解体済みの石塔の基礎石の周囲を掘り下げている。

第６次調査は，平成11年度で，石像の基礎石設置箇所の調査が実施されている。

塚内外から出土した石塔・石像の部材以外の遺物としては，次のようなものがある。少量の弥生中期末山ノ口式土器，古代の須恵器，中世常滑，瀬戸・美濃，備前，中国製青磁・白磁・青花，タイ製陶器，近世土師器・陶磁器等。また，鉄滓，古銭，焼成粘土塊，土製品，瓦，古石塔なども少量みられた。特筆すべき遺物としては，14世紀磁州窯系翡翠釉陶器壺がある。この陶器が，外側の版築から出土していることから，中世後期にも修復をしたことが判明している。

特徴

主な調査成果をまとめると，塚は自然の山を少し掘りくぼめ，その中に黒い土や砂などを交互に入れ，また，玉石も入れて，突き固めていたことが明らかになった。整地をした後に，その上に塔を建てる版築と呼ばれる工法である。その範囲は11×６ｍで，厚さは１ｍ。

塔や石像を囲むように，長い棒状の石を２列，長方形にすえていた。規模は14×９ｍで，塚の古い形は長方形を呈していた。

北側コーナーから出土の石像基礎石と石像脚部は，石像が本来四方に配置されていたことを裏付けている。笠石・軸等の多くは，検出層からみて，その大半は江戸後期に崩落したものと思われた。

このように調査では多大な成果があったが，史跡整備のための発掘調査であり，創建年代の特定にはいたらなかったが，版築工法をもつということは，

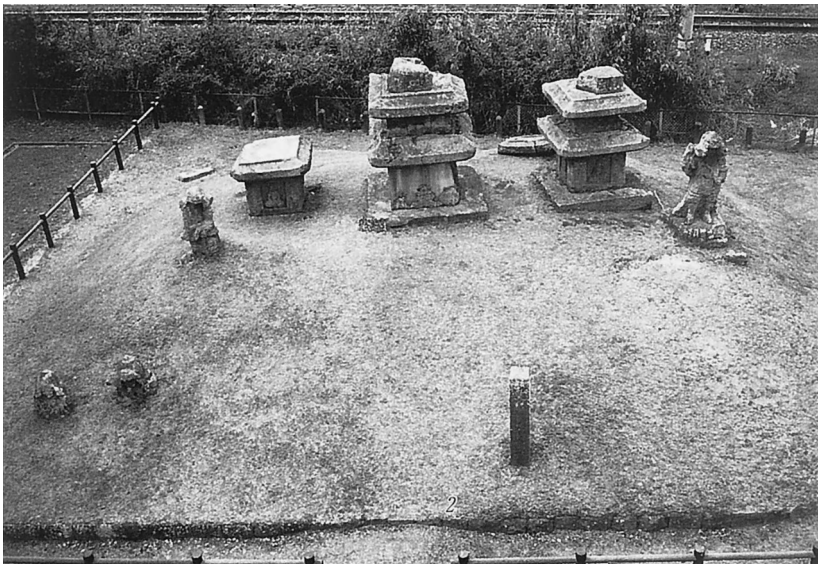


写真１　発掘調査前の隼人塚

写真２　石塔Ｃ

写真３　石像３

写真４　柱状石列

写真５　出土した石像脚部

写真６　修復作業

写真７　修復された隼人塚

決して明治頃に築かれたものではないことを示している。

塚の上に立っている石塔・石像が，地中に埋もれていた部材と一緒になるのは，おそらく二，三百年ぶりのことだろう。とすれば，平成の大修理とも呼べる歴史的な事業である。地震等にも充分耐えられようにする必要があり，掘り出された部材は，風化防止のため，石材強化剤OH100を含浸させた後，接合できるものは，ピンニング工法によって，ステン全ネジピンで固定され，創建当時の姿に蘇っている。

資料の所在

現在，隼人塚史跡公園として整備され，ガイダンス施設の隼人塚史跡館も隣接している。出土遺物の石塔・石像は接合，薬品による補強の後，復元で使用された。また，陶磁器等の一部などは史跡館に展示され，その他の遺物は隼人町教育委員会に保管されている。

参考文献

隼人町教育委員会　1998『国史跡隼人塚－山跡遺跡発掘調査概報－』

隼人町教育委員会　2000『山跡遺跡Ⅰ－隼人塚発掘調査編－』

（重久淳一）